



題字は元同窓会会長門馬直孝氏

原高同窓会会報

3月1日 月曜日
令和3年(2021年)

発行所
福島県立原町高等学校
同窓会

福島県南相馬市原町区西町3-380
電話 (0244) 23-6196
印刷所 有限会社ライト印刷



本日、福島県立原町高等学校第七十三回卒業証書授与式が挙行されます。新たに会員となる一四七名のご活躍を心からお祈りします。

うつし世の 嵐に負けず

原高の伝統を繋いだ一四七名

本日晴れて卒業



今できることに全力を

同窓会長

杉 昭重

(二十二回卒)



第七十三回百四十七名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。これまでの蛍雪の功成り、人生の新たなステージに進まれる皆さんの奮闘を期待するとともに、原町高校同窓生となられました皆様を大いに歓迎するものであります。

二〇二〇年はコロナ禍等もあり人々の生活が一変しました。高校生活も例外ではありません。校歌を声を出して歌うことも少なくなりました。私もこれまで数多くの卒業式に出席してきましたが、いつ

で、皆さんにも感謝を込めて、校歌を全力で歌ってほしいです。私も来月、福島市で開催予定のイベント「歌おう！古関メロディ」では同窓生の皆さんと一緒に原高校校歌を全力で歌います。

また、コロナ禍では震災・原発事故のときと同様、心ない差別や偏見など、人々の心の有り様が問題になっていいます。私が最近、注目している言葉が「忠恕の心」です。二〇二四年に新しく一百万円の肖像となる浪沢栄一氏が大切にしていた言葉でもあり、切に感じていた言葉でもあります。論語に「夫子の道は忠恕のみ」とあります。夫子とは孔子のこと、「孔子の教えは、忠恕、即ち真心と思ひやりのみ」ということです。人間にとって一番大切なのは、真心と思ひやりのこと、孔子は断言しています。コロナ禍という大変な時期でもこの「真心と思ひやり」が大切です。世界中

の人々が感謝の気持ちを抱きながら「真心と思ひやり」で接すれば、争いはなくなり、平和な世の中になります。そして、今、コロナ禍においても、置かれた環境に於いて、創意と工夫を重ねながら、自分の出来ることに全力を尽くす事が大切です。

さて、今年、皆さんが共通して行うことがあります。日本のリーダーを決める衆議院選挙です。国政選挙は初めての事だと思えます。前回の国政選挙は十八歳・十九歳の投票率は三十一・三三%でした。国のリーダーはその判断を誤ってはなりません。そのリーダーを決めるのは私たち一人一人の有権者です。リーダーとしてふさわしい人を選ぶため、選挙に行きましょう。

今求められる人材育成



校長 山崎 雅弘

今年も百四十七名の卒業生が原町高校から次のステージへ向かいます。それぞれの今後のステージにおいて出会いがあり、同窓の先輩から育てていただく機会もあろうかと思えます。その際は、ご指導をどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年度は諸行事において新型コロナウイルス感染症対策が求められ、入学式では保護者の出席をご遠慮いただき、一年生の校歌・応援歌練習も、野球の定期戦も出来

ず、春の風物詩がないままに臨時休校という年度初めを過ごしました。伝統の合唱コンクールも開催を断念し、三年生にとっては集大成と位置付けられる部活動の大会や発表会も予定通り開催されず、悔しい思いをいたしました。また、一年生にとっては入学したばかりの休校によって、高校生活に馴染む時期が大きく遅れたことも否めません。さらには、マスクが名前の記憶を妨げた上に、表情から察することもできない不便さの中

で、「新しい生活習慣」での学習活動が続いています。そうした中においても、現代に必要とされる資質を備える人材の育成を目指して高大接続改革が進められています。生徒が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し、解を導き出す能動的学習の充実がテーマとなっております。その改革の一つである「大学入学共通テスト」が初めて実施されました。その問題を見ると、学習のプロセスや日常生活の場面の題材とした内容や複数の様々な文章や資料を活用する能力を問う問題が多く出題され、単なる暗記と再生力を求めるのではなく、思考力・判断力・表現力を重視して評価するような問題となっています。この問題の意味するところを十分に日ごろの授業に反映させていくことこそ、今求められる人材

育成と言えるでしょう。もう一つ、本校が取り組む人材育成があります。それは、普通科高校を特色化するという施策において、県教育委員会と医療関係従事者の育成です。令和五年度からのスタートに向けて準備を進めることになりましたが、これまで以上に地域連携や高大連携を深め、この地域に必要な人材を育てていくという使命を強く意識してまいりたいと思っております。

今後も同窓生の協力を得ながら、社会に貢献できる有為な人材を育成してまいります。と考えていますので、引き続き変わらぬご支援、ご指導をお願い申し上げます。



福島県を代表する作曲家、古閑裕而氏は、NHKの連続テレビ小説『エール』のモデルとしても大きな話題となった。本校の校歌も氏の作曲であり、創立から本校の校風を象徴するものとして受け継がれ、今日に至っている。その校歌について、旧職員でもある山崎健一先生にご執筆いただいた。

原高校歌は自由と平和の歌



山崎健一
(十六回卒)

昨年、作曲家古閑裕而氏が妻がモデルのNHK連続テレビ小説『エール』は大きな話題となり、古閑氏作曲の「原町高校校歌」もNHKで全国放映され「懐かしく、大変誇りに思った」という同窓生の声もたくさん聞かれました。この機会に改めて、「原高校歌」について考えてみました。

【栄冠は・1に授けし栄冠】
まず、鈴木校長が多田先生に作詞を委嘱し、多田先生が親交深かった古閑氏に作曲を依頼して校歌が作られました。曲想は、長かった戦争の暗さや閉塞感を吹き飛ばすように開放的で明るく、軽快で躍動感に溢れ、前年作曲の『栄冠は君に輝く』に似ています。歌い方について古閑氏は多

田先生への手紙の中で、「苦心して作曲しました。行進曲の速さのテンポ (Tempo: Marcato) で歌い、「われら」を「われら・われら」と繰り返して歌うほうがずっと面白味があります」と指導されています。

【自由や平和を讀める歌】
次に作詞の多田利男先生について。南相馬市鹿島の出身、東京大学文学部卒業。昭和二十三年五月から三十五年三月まで十二年間英語科教師。草創期の原高で生徒会や新聞部顧問などを通じて啓蒙的な役割を果たされ、原高の未来像を示し、生徒からの信望もあつかった。退職後は麻布大学教授に就任されました。その歌詞は平易でも洗練され、渋谷など郷土の地名を織り込んで上品です。何より戦争への憎しみや反省から、「平和」や「自由」を讀める歌と言えます。次世代を担う原高生たちへの大きな期待や深い思いが込められ、作詞から七十二年間文言はそのままに歌い継がれています。具体的には、歌詞一番では「大いなる力みなぎる」と

意志の強さや、「我ら興さんと敗戦からの復興を。一番は「とこしえに平和のしるし、我ら結ばん」は同時期に施行の日本国憲法の平和主義とお互いの協調と結束を。三番は「流れやすまず、我ら学ばんと日々」の学習の大切さを。四番では「うちびく自由の鐘」の学び舎で、勉学にスポーツに励もうと訴えています。この校歌が全校生で斉唱されて初めて、「原高生」としての自覚や誇り、また一体感が生まれたように思います。

【なぜ一番と四番を歌うのか】
ところで「原高校歌」は歌詞の一番と四番が歌われてきました。それはなぜなのか。一番は力強い歌い出しです。二、三、四番を比較すると、四番は「自由の鐘」「いざとに我ら励まん」と理想や強い決意が示され、「自由」や「鐘」が憧れとして好んで歌われるようになったのでしよう。やがて校歌の「自由」は、校訓の「規律・協同・責任」に裏打ちされ原高の校風になっていきます。それは創立が明治時代の相馬高校、大正の双葉高校に対し、原高は昭和で歴史が浅く束縛が小さかったことが一因ではないかと思われまふ。早々に昭和二十三年からの男女共学、昭和三十年から男子の長髪許可も象徴的なことです。

【達成された校歌の全国放送】
多田先生は晩年、「いつか甲子園で原高校歌が全国に中継されるのを聞きたい」と同窓会報に寄稿されていました。図らずも昨年六月、『エール』ブームの中で、古閑裕而氏の手紙が紹介され「原高校歌」がNHKテレビ「ここに福あり」で全国に放送されました。多田先生ご逝去の三十八年後に、その望みが叶えられたと嬉しく思います。真摯な夢や希望は、いつかは実現されるということでしょうか。

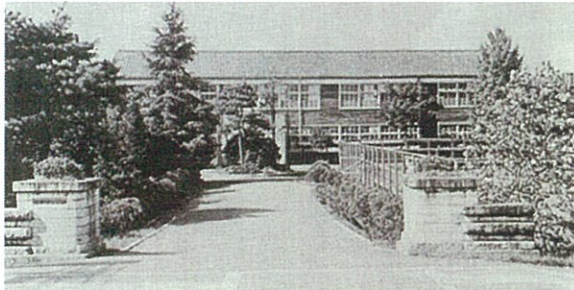
「原高校歌」の制定は、終戦から四年目の一九四九(昭和二十四)年のこと。作曲古閑裕而氏、作詞は当時の英語科教師多田利男先生です。前年の学制改革で「相馬商業学校」が「県立原町高等学校」となりますが、男子の商業科・普通科に、「原町女学校」の女生徒が吸収併合で加わり、校内は混沌としていました。先生方も創立以来校長だった鈴木勝利先生も、相馬商業学校や原町女学校の校歌ではなく、早く新しい校歌を制定して全校生で斉唱させ、落ち着いた学園にしたいと望んでいました。



作曲家
古閑裕而氏



作詞者
多田利男 教諭



1939 (昭和14)年の創立から
1975 (昭和50)年までの原町高校小川町校舎
72年前の昭和24年
ここで原町高校校歌が誕生しました

また創立六十周年記念誌は『自由の鐘』の標題で発行され、七十・八十周年誌も『自由の鐘II・III』と同名で継承されています。まさに最適な命名と敬服しています。

原町高等学校校歌 多田利男作詞 古閑裕而作曲

一 ひんがしの あけゆく海に
お、いなる 力みなぎる
浪の浜、波白くして
磯つとよ うましく国はら
いざとよに 我ら興さん
二 阿武隈の 山なみはるか
いにしへの 伝えもゆかし
国見山 雲たなびきて
とこしえに 平和のしるし
かくてこそ 我ら結ばん
三 ひろき野の みどりのなかに
ゆたかなる 土をやしなひ
新田川、水清くして
日に月に 流れやすまず
かくてこそ 我ら学ばん
四 うちびく 自由の鐘に
こぞり立つ わが学び舎
日の光 真かざして
うつつ世の あらしにまけず
いざとよに 我ら励まん

第2回柏曜賞 受賞者の横顔



館野湧太さん
(3年4組)

【受賞の感想は。】
「とてもうれしいですが、この賞に見合う人間になれるのかプレッシャーも感じます。それをねのけて社会で活躍できる人間になりたいです。」

【漫画雑誌の編集者になりたいと考えていて、大学ではメディアについて学ぶつもりです。漫画はまず単純に面白い。人々に刺激や活力を与える力を持つていると思えます。読む人の世界を広げてくれるような作品を届ける仕事に魅力を感じます。」

【原高での三年間の印象は。】
「僕だけではないですが、様々な変化(変更)に対応しなければならぬ三年間で、それでも求められるものに柔軟に対応できたと思えます。僕たちの世代はそんな力が他の世代よりも備わったかもしれません。」

【館野さんは生徒会長も務めました。】
「良い意味で打たれ強くなつたと思います。トライアンドエラーで考えた案がダメならもつと良いものに作り直す。一緒にやってくれた仲間には本当に感謝です。」

【後輩に贈る言葉はありますか。】
「焦ることなく心に余裕を持ってやっていって下さい。つらいことがあったらいったん距離を置いて気持ちを整理してみる、という選択肢を持つのも良いことだと思います。」

【同窓会総会について】
母校での学びや出会いを糧に、今後一層活躍されることを期待したい。柏曜賞は二月二十六日の表彰式で授与される。

事務局より

●同窓会総会について
新型コロナウイルスの流行により、昨年八月一日に予定されていた令和二年度同窓会総会は開催中止となりました。準備されていた議案の審議については、事務局より役員の皆様へ資料を郵送し、紙面表決の手続きを取りました。集計の結果を報告させていただきます。今年度は二年ごとに行われる役員改選の年でしたが、会長と事務局の協議により、今年度の一年間留任とし、現役員の方々に了承いただきました。

●活動協力金の現状報告
今年度は四月六日に柏曜会館において、役員及び世話人が中心となり活動協力金募金に関する準備会を実施しました。準備会では趣意書の配布計画と目標金額等を確認しました。その後の募金活動の結果、二月八日現在、五十四万七千円(手数料一万七千七百四十四円を含む)のご寄付をいただいております。ご寄付はこれまで柏曜会館の施設修繕に使用してきました。今年度は柏曜会館の階段天井部分の雨漏り箇所を修理する予定です。

●来年度も現役生徒の活動の支えになるように、活動協力金の募金活動を行う予定です。今後ともご協力をお願いいたします。



同窓会へのお問合せや紙面へのご意見・ご感想は下記までご連絡ください。

原町高等学校同窓会事務局
E-mail : harakou.dousoukai@gmail.com
TEL 0244(23)6196 FAX 0244(23)7909
学校ホームページも随時更新しています。あわせてご覧ください。

原町高校ホームページ

活躍する同窓生

誰も見たことのない、他の人がやらないような作品を

若松 央樹さん (三十九回卒)



「電車男」「だめカンタービレ」「帝一の國」そして「翔んで埼玉」... 特に若い世代に人気の俳優がそろい踏みのこれらの映画やテレビドラマ。中には社会現象とも呼べるほどの話題となった作品もある。機フジテレビジョン勤務の若松央樹さんは、これらの作品の生みの親とも言えるプロデューサーの仕事をしている。先日、現役生徒数名に「帝一の國」のプロデューサーとなり、原高出身だよ」と明かしたところ、驚きと興奮の歓声が上がった。一昨年公開となり、日本アカデミー賞三部門で最優秀賞を受賞し話題をさらった「X」ディレクターとなり、若松さんはこの作品により、映画界で唯一プロデューサーの業績を称える賞「第38回藤本賞」で特別賞(「万引き家族」の是枝裕和監督と同じ受賞)、さらに「第44回エランドール賞」でプロデューサー賞を受賞。日本のエンターテインメント界をけん引する若松さんにお話を伺った。

「今、会社からです。十二月の夕刻、オンライン会議システムZOOMがつながると、若松さんはまず、モニター越しに窓の外の東京お台場の夕空を見せてくださった。

● **会社での役職をお伺いしてもよろしいですか。**
編成制作局映画事業センター映画制作部専任局長となりまして。長くてすみません。数々の受賞おめでとうございます。

● **プロデューサーとは実際にどのようなことをする**
プロデューサーは俳優に比べて地味な仕事ですが、評価していただけてうれしいです。



取材はZOOMでお受けいただきました

● **映画『翔んで埼玉』では**
幼少の頃に市内の映画館へ両親によく連れて行ってもらいました。朝日座です。チャップリンの映画を見せてもらったのが、映画との最初の出会いだっけな気がします。小学生の頃に見た「スターウォーズ」や「カサンドラ・クロス」は印象に残っています。「銀河鉄道999」は続けて三回見ました。幼いころから多感な時期にかけて良作を見せてもらった経験が今につながっていると思います。

● **お父様は詩人で原高旧**

職員若松丈太郎先生と伺っています。

● **原高から早稲田大学へ進学された。**
原高では放送部でした。部屋に集まってわいわい過ごす時間が楽しかったですね。兄が大学で演劇サークルに入っていたこともあり、自分も大学では演劇をやっていました。俳優の経験もありですが、やはり監督や演出の方がおもしろかったです。今していることを仕事にしていきたいという気持ちが高まり、卒業後は日本テレビに入社しました。父と兄の影響は大きかったと思います。途中、映画会社での仕事も経験しましたが、本格的に作品作りに取り組みみたいとフジテレビへ転職しました。

● **テレビドラマと映画の両方を作られています。より楽しいのはどちら、という**

● **若松さんプロデューサーの主な作品**
ドラマ「電車男」(05)、「だめカンタービレ」(06)、「風のガーデン」(08)、「最後の恋」(13)、「失恋シヨコ」(14)、「他」
映画「帝一の國」(17)、「翔んで埼玉」(19)、「ラタタ」(20)「恋は難しい」(20)

のほほほですか?

テレビドラマは一時間を数回という構成のいわゆる連続もの。映画は「一つの作品」薄暗い映画館の中で作品の世界に浸りきる没入感というの(テレビとは)また違いますが、もともと興味があったのもありますが、やっぱり映画は楽しいです。ここから先は映画作りへ進んでいきたいと考えています。テレビは若い人にだんだん譲っていかうかと。(笑)

● **映画『帝一の國』『翔んで埼玉』の二つとも高校が舞台です。「学校」というのは若松さんの作品世界のテーマなのではないですか。**

学校は世界の縮図といってもよいと思います。あらゆるものが詰まっています。「帝一の國」では、高校生が生徒会というある種政治の世界に関わっていくところに面白さがあります。

● **二作品とも振り切れたキャラクターが登場し、型破りな世界が繰り広げられて**
ていきますが、ところどころ現実を思わせる部分にも相当笑わせられました。ジャンルで言うと私はコメディが好きなんです。今のドラマなどは刑事や医者、コメディでも恋愛もの(ラブコメ)がほとんどですが、あまり面白みを感じません(笑)。くだらないことで大笑いできることが自分でも好きだし、大事なことだとも思います。これまで、本当に面白いコメディというのがある聞き作られてきていません。聞き慣れない言葉かもしれませんが、「出現感」を大切にしています。誰も見たことのないような映画、他の人がやらない映画。こんなものが出て来るとは!というのを作り出していきたいのです。

● **著名な俳優と仕事をするというのはどのような感じなのでしょう。**
中学高校からずっと大ファンで、コンサートにも行ったことのある女優さんとドラマをやることになった時は内心ドキドキしましたが、そこは仕事ですから(笑)。悟られないようにしてプロデューサーの立場で堂々と接しました。また、今の若い俳優さんたちはみんなとても真面目だと思います。

● **差し支えなければ、この後の作品の予定を伺ってもいいですか。**
以前公開になった映画の続編企画のお話の中で、主演俳優の名前にこちらが舞い上がってしまうと、「私も緊張しますよ(笑)」と若松さん。好奇心からの質問にも、終始笑顔で気さくにお答えいただきました。中でも「出現感」という言葉には、現状を打破する勢い、時代を作り出していく覚悟のようなものを強く感じました。若松作品を楽しむ上でキーワードであるだけに、今後の日本のエンターテインメントの方向にも影響を持つ言葉ではないでしょうか。年始から十一都道府県に緊急事態宣言が発出された二〇二一年。若松さんによって作り出される作品が、日本全国に笑いや勢いをもたらしてくれることを期待します。これからの益々のご活躍をお祈りいたします。



大ヒットの『翔んで埼玉』

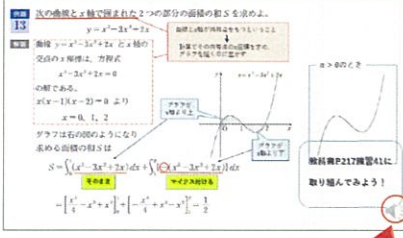


トロフィーではなくなぜか水を持っている?

母校近況

● **コロナ禍中の知恵**

新型コロナウイルス感染症の拡大が学校現場に直接の影響を及ぼし始めたのが昨年三月。二週間の一斉臨時休校を経て、四月に学校を再開。入学式は保護者の来場を遠慮いただくなど異例の年度初めとなる中、四月二十一日からは国の緊急事態宣言により二度目の臨時休校を余儀なくされた(五月三十一日まで)。休校中、生徒たちには各教科より家庭学習が課される中、オンラインによる学習サポートの取り組みが進んだ。学年ごとに「スタディサプリ」「Classi」「Google Classroom」といった学習アプリが用いられ、講義の解説動画の視聴、課題やテストの配信と提出、また一部授業では「L2D」チャットを利用した教師と生徒のオンラインでのやり取りも実施された。学習以外でも、進路情報の提供、クラス担任との個人面談、生徒の状況を把握するための毎日のアンケート回答などの登校制限下で有意義な活用がなされた。いずれも生徒個人がスマホやパソコンを所有していることが前提であるが、校内のパソコンやタブレットも自由に利用できるような備えが、コロナ禍をきっかけに進んだオンラインの活用。収束後



配信画面の一例(3年生数学Ⅱ) 右下のスピーカーマークをクリックすると音声解説が聞ける。

● **音楽の力を今こそ**

校内合唱コンクールをはじめいくつもの学校行事が中止や縮小となる中、九月二十一日、南相馬市民文化会館ゆめはつにおいて原高吹奏楽部第三十六回定期演奏会が開催された。来場者を学校関係者と部員保護者、市内中学校吹奏楽部員に制限するなど、例年とは異なる形での開催。今年度赴任した顧問の鈴木明香先生(五十四回卒)は、「他の部活では代替大会等も行われていたようですが、吹奏楽では三年生最後の大会が完全になくなってしまいました。三年間の締めくくりとして定演だけは何とか開催したかった」と語る。昨年三月に出場予定だった全国レベルの大会も中止となっていては「演奏会をする場合ではないのでは、という意見もあったかもしれませんが、だからこそ対策を万全にして納得してもらえよう」と、生徒の体調面に加えて観客を迎える準備にも腐心した。例年五百余の観客数は、今年は間隔を取った指定席制とし二百名程度。それでも本格的な「原高サウンド」を堪能できる第一部、人気のポッツで構成された企画ステージの第二部とも、会場から惜しみない拍手が最後まで送られた。第二部終了後にはステージ上で涙ぐむ部員の姿も印象的だった。「三年生はやり切った、という気持ちでステージを終えられたと思います」。



も生徒の学習活動に効果的に用いられるようさらに工夫を進めていく。